

鈴木鎮一著「より多き訓練」才能教育 172 夏 2010 才能教育研究会 2010年6月15日刊を読む

より多き訓練

1. 能力はつねに訓練のあるところに育つもので、植物に太陽の光と熱が必要であり、また、その育ちを運命づけると同様に、才能は、訓練という陽のあたらないところには育ちが悪く、一日中、陽のあたっているところはよく育つのである。また、熱の強いところは、熱の弱い場合よりも、その育ちがよいのである。
2. 光と熱、それが、訓練と熱意との問題にあたるのであろう。
3. よい才能を育てようとするならば、正しくよい訓練を行わねばならず、下手な悪い訓練を盛んに行えば、才能は立派に、下手な方へ育ってゆくのである。
4. 努力して下手になる人、努力して立派になる人、それは各自の訓練のやり方によって決まるわけで、努力したから立派な才能が育つというわけではないのである。
5. 才能は訓練のあるままに育つもので、よくなりたいたいとか悪くなりたいたいとかの意志を持つわけのものではない。それが善であろうと悪であろうと上手も下手も美も醜も少しも区別なく、訓練のままに育つのが才能である。
6. この本質を心得た人々は、同じ努力をするにしても、より正しいことの訓練を行うのが当然であるから、そうした人々は優れた能力を持つと言われるのである。これに反して、考えなしに、無闇むやみに努力する人々には、往々にして才能がないのだと言われている。
7. しかし、その人の才能は下手の方向へ訓練して育てられただけのことで、才能がないのではなく、よく育った人々である。
8. 努力しない人々には、才能が育ちようもない。だから、怠け者こそ、本物の才能のない人々である。
9. 訓練のないところに能力は育たない。しかし、育たないだけですむならば、思い出したときに始めればよいわけなのであるが、訓練のないままにすててあるものは、退化する。つまり本質が低下してゆくのである。
10. 能力を発揮する道具は生きものである。その発育に必要な栄養は訓練である。生きものである

限り、栄養を与えないで、いつもすてておくと、栄養失調か、衰弱の一途を辿る^{たど}わけである。

11．親達は眼に見える子供の成育状態や、病気については真剣になっているが、可愛い自分の子供の眼にみえない、しかも、その子供の一生の幸不幸を支配する能力が、栄養失調であろうと、衰弱して枯れそうになっていようと、さっぱりおかまいなしである。

12．知らぬが仏のたぐいと笑ってはおられない問題である。

P6 ~ 7

[コメント]

バイオリン教育のスズキメソッドの創始者の教育論は、読むたびに心を打たれる。教育者としての熱い情熱を感じる。「より多き訓練」はすべての教育に通じると考える。

- 2010年8月3日林 明夫記 -